

本日の学び:「真の幸いに至る道」 テキスト:エレミヤ6章13-17節

【理解の手がかりとして】

### ■ エレミヤについて

エレミヤはユダ王国衰亡期に活動したユダの預言者(活動期:前626~586年)である。彼は祭司の家系に生まれて、人間性の洞察が鋭く、「心情の預言者」と呼ばれている。

前587年、バビロニア王ネブカドネツアルの攻撃によってエルサレムが陥落した時、新バビロニア軍はエレミヤの「敗戦主義」を高く評価し、彼を好遇し、彼の意志に任せて故国に留まることを許す(エレミヤ39~40章)。新バビロン帝国によって任命されたユダの総督ゲダルヤがユダの王族によって暗殺された後、彼は抗戦派の人々によってエジプトに強制的に連行され、その地で殺害されたと伝えられている。

エレミヤは、召命の当初はヨシヤ(前640~609:ユダ15代の王、律法の書を発見し、宗教改革を行った)の申命記改革に協力したが、ヨシヤの没後、当時の国際情勢からエルサレムと神殿の滅亡を必至と見て、宗教の内面化、すなわち「新しい契約」としての心の宗教を説き、イスラエル民族再生の伏線を引いた。

彼は、イスラエルの敗北は、ヤーウエが罪悪の中にあるイスラエルを信仰的に純化するために国家滅亡という試練を与えられたもので、それは神による愛の懲らしめと受け取った。ここに彼の逆説的な信仰の、底知れぬ深さがある。彼は「新しい契約」の思想によって新しい人格宗教の基礎を置き、新約時代への方向づけをした。

### ■ 本課のテキスト(6:13-17)から

この6章には、迫り来る戦争の様相が明白に記されている。エルサレムの町が、今や、攻立ててくる敵の直接の戦場となっているのである。そしてエレミヤが見つめるのは、その悲劇に見舞われているユダの民の内面の罪である。

その罪の内実とは ※『聖書教育』より

- ① 利をむさぼり(6:13)…自己利益のあくなき追求、神への背信(偶像崇拜)、隣人への不正義、憐れみの欠如。
- ② 欺く(6:13)…厳しい現実我真摯に向き合わず、言葉に対する真実さを欠き、偽りと偽善を言葉によって塗り替え、ごまかす。「平和がないのに、『平和、平和』と言う。」(6:14)

預言者エレミヤの思いは、絶えず繰り返し、民の罪の問題をめぐる。救済を約束する他の預言者たちの皮相さとは異なり、彼は民の吟味と自己検証を課題として深刻に受け止めているからである。ただ勿論、エレミヤとて、実は、彼の民を救済の道に導こうと努めているのである。

16節は有名な一節。「イスラエルが、どの道を選び、どのように行き歩むかが、今ここで問われている。…正しい道を選び取れとの招きなのです」(『聖書教育』)——しかし民は言う。「そこを歩むことはしない」と。

17節も招きの言葉。「(警告の)『角笛の響き』を待ち、聞き取り、生き方を変えなさい」(『聖書教育』)——しかし民は言う。「耳を澄まして待つことはしない」と。

今一度、エレミヤの活動した時代と彼が求めた真の改革について深めておきたい。前述のとおり、エレミヤは歴史の大きな転換期に生まれ活動した。アッシリア帝国の衰退期から新バビロニア帝国の興隆期にかけてのことである。古代イスラエル民族が形成した二つの王国のうち、北イスラエルは既に滅び、残されたユダ王国が一時、宗教的・民族的復興運動を試みた。この契機となったのが(こちら先述の)ヨシヤの宗教改革であった。しかしその運動は、宗教の外面化(律法の順守・儀式の尊重)をもたらす危険があった。

宗教の内面化を深める方向ではなく、律法の外面的順守が強調され、割礼や安息日、食事の律法などの民族的律法が強調されていくことの中で、そのような厳格な律法の実践を神の祝福と直結する倫理的合理主義の立場を固守すれば、信仰のゆえに直面する苦難という不条理を克服し得ないだけでなく、自らを迫害・抑圧する異教徒に対しては神の復讐を祈る偏狭さを免れえなかった。

そこでエレミヤは、人間の心を問題にした(4:4「心の包皮の割礼」)。また彼は自分自身の心を問題にし、神に召された預言者でありながら、神の与えた使命と自己自身の現実との間に悩み苦しんだ。

古代宗教は、儀礼と律法と慣習によって支えられていた。ヨシヤ王を指導者とする全民族的な宗教改革運動は、その熱心さのゆえに、非人間的な厳格さを示すこともあった。律法の順守のためには、兄弟、息子、娘、愛する妻、親友とすら、生死をかけた対決をすべきであると説き、また、異民族に対する偏狭な見方も認められた。この偏狭さからくる宗教の外面化と最も激しく対決した人物がエレミヤであった。

人間は常に自己自身に対する吟味と闘いなしに、神が与えられた人間としての自由と尊厳を正当に生き抜くことは出来ない。エレミヤこそ、そのような自己吟味と自己との闘いを生き抜いた人物であった。自己の枠組みを越え、同時に自己の民族的な枠組みを越えようとした。こうして、彼は「内面的宗教」へ、律法と民族の枠組みを越えるイエスの宗教へ至る道を切り開く人物となったのである。

主イエスは言われた。「聞く耳のある者は聞きなさい」(ルカ8:8)と。